

# 英語劇団 The Peach Pits の活動報告と 授業への演劇の導入に関する一考察

## A Report on the Activities of the English Drama Club "The Peach Pits" and Thoughts on the Introduction of Drama Activities into an English Class

(2006年3月31日受理)

佐生 武彦 橋内 幸子 垣見 益子  
Takehiko Saiki Sachiko Hashiuchi Masuko Kakehi

Key words : English Drama, Original Scripts, jokes, English Education

演劇を導入したESLの授業が、受講生の英語能力（音声、語彙及び身体表現）の向上に有効だと言われる。本学の英語コミュニケーション学科では、過去6年に亘って、部活という形ではあるが、一部の学生に対して、舞台を作り上げる過程で総合的な英語指導を実施してきた。経験的に知り得た演劇による効果を考慮し、ドラマを演習として授業に取り入れ、カリキュラムの中に定着させたいと思っている。この可能性を考えながら劇団のこれまでの活動を報告する。

### 0. はじめに

本小論では、英語コミュニケーション学科所属の英語劇団The Peach Pits（桃の種）の活動を報告する。さらに、劇中で使用する自作スクリプトの有用性を論じ、演劇活動の授業への導入を検討する。「発音やイントネーションが良くなる」という演劇の効用のために、授業で取り上げる価値が大いにある演劇活動であるが、授業として扱うには大きな問題が妨げになっている。その問題と解決方法を探る。

### 1. 英語劇団の誕生

平成11年4月、現在の「英語コミュニケーション学科」が、「英語英文科」から名称を変更し、新たなスタートを切った。これを機に、執筆者の一人である佐生が、前任のネイティブ講師、ステイブン・サレル氏の協力を得て、演劇を媒介にした英語・コミュニケーション教育、及び異文化理解教育の実践の場として、英語劇団を立ち上げた。劇団名は、岡山名産の白桃と桃太郎にちなんで、The Peach Pits(桃の種)と名付けられた。

2年生12名と1年生5名からなる総勢17名。今にして

思えばかなりの大所帯で、「英語劇をネイティブの眼前で」を目標に掲げて劇団の活動が始まった。設立後の最初の目標として、在岩国の米軍基地を訪問し、在留米兵を観客として公演を行うという計画が立てられた。実際、演題を2つ用意して、この目標に向けて稽古に励んだが、「たとえ交流が目的であるとしても外部の団体は基地への立ち入りは認められない」という、至極もつともな理由で計画は没になってしまった。意気消沈した劇団は、結局、どこの舞台に立つこともなく、演技をビデオに収めただけで、初年度の活動を終えた。

翌12年、The Peach Pitsは短大のサークルの一つに加えられ、佐生が顧問兼座長として、劇団の指導に関わると共に、学科のバックアップを強化し、年に一度の定期公演を実施するようになる。続く13年には、サークルから部への昇格が認められ、英語劇部として活動を継続することになる。

設立当初から数年間は、学科イベントのための専属劇団の様な存在でしかなかったが、17年度には、6月に開催された中国学園の新イベント「七夕祭」に出演するなど、全学的な活動が展開された。この七夕祭では、音楽科の「音楽牧場」とのジョイントという新しい試みがなされている。

## 2. 英語劇団The Peach Pitsの活動

表1には、劇団が過去6年間の公演で扱った題目が記載されている。表記が英語とあって紛らわしいが、日本の昔話が3本（「浦島太郎」「サルカニ合戦」及び「桃太郎」）、順番に1年または2年おきに上演されている。加えて、表題に“Santa”が含まれるものが2つあり、前述の七夕祭で演じられたものが1つ加わっている。後者の3つについては、それぞれ学科のクリスマス会、及び学園の七夕祭で演じられた短編であることと、扱っている内容の性質上、劇団の活動としては「余興」的な位置づけになっている。このため、以下では、主に「日本の

昔話3本」について論じることとし、余興の3本については必要に応じて言及する程度にとどめる。

上で示唆したように、劇団The Peach Pitsは、主な演題として、日本の昔話を積極的に取り上げている。英語による演劇といえば、通常、シェークスピアに代表される英文学に題材を求めることが多いと思われるが、学科が掲げる「発信型」の英語コミュニケーション教育を実践すべく、劇団では「借り物」や「物真似」でない土着の文化遺産から題材を拝借している。現在のレパートリーは上記の3点である、それぞれ過去に実施された米国やオーストラリアへのホームステイ研修の際、ホストファミリーを前にして、実際に学生が演じた作品である。これらの現地での舞台が大受けしたことが、劇団をして日本の昔話に演題を限定する理由となった。



写真1 Urashima Taro平成17年7月

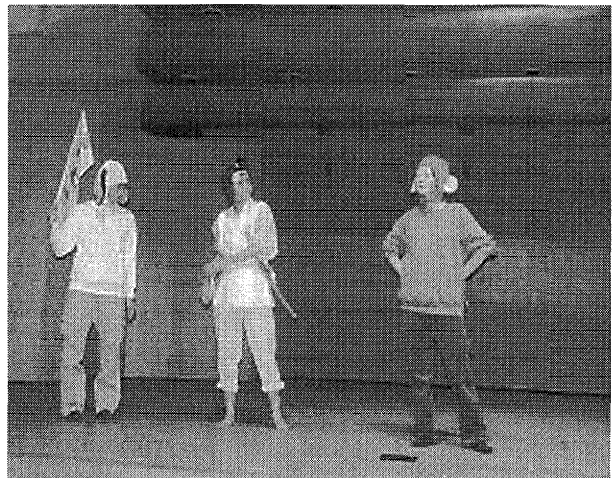


写真2 Momotaro 平成17年12月

年度	夏季公演（7月）	冬季公演（12月）	
12		The Tale of Urashima Taro:Taro Goes Down Under	
13		The Battle Between the Monkey and the Crab	
14		Santa Claus is Comin' Chu-tan	
15		Momotaro: The Peach Boy The Tale of Urashima Taro: Taro Goes Down Under	
16	The Battle Between the Monkey and the Crab	Santa & the Reindeers	
17	七夕祭（6月）	The Tale of Urashima Taro: Taro Goes Down Under	Momotaro: The Peach Boy
	Down By the Milky Way		

表1 過去の公演題目

### 3. 自作スクリプトの有用性

劇団The Peach Pitsが演じる演題のスクリプトは、結成以来、すべて自作のものを用いている。今後もこの方針が変わることはないであろう。前章で見た6つの作品のうち、3つの昔話については、それぞれ佐生が執筆し、歴代のネイティブ講師が加筆・修正を施している。他の3編も佐生が書き下ろしたものである。劇団が自作の作品にこだわる理由を、英語教育・コミュニケーション教育の観点から、2つ論じておきたい。

#### 3-1 創作意欲へのインセンティブ

一つめの理由としては、学生の創作意欲を喚起するという利点がありそうだということ。身近な教員の執筆による自作スクリプトの使用は、劇に取り組む学生自身が自力で作品を書き始めるインセンティブになり得るのである。過去の事例であるが、「面白いセリフがあれば付け加えてもかまわない」という発言を受けて、「自分のセリフをこの様に変えたい。こんな英語でかまわないか」と申し出る学生が何人かいた。「そのセリフは、あなたの次のセリフに関係があるから、変えられない」と答えながら、セリフ間の関係を説明したことがある。小さな第一歩ではあるが、創作意欲の萌芽である。スクリプトに散りばめた言葉のつながりや連関を意のままに説明できるというのも自作の強みであろう。シェークスピアならばとも著名な劇作家の作品等を演題に取り上げた場合、学ぶことはもちろん多いものの、創作意欲が芽生えることは希であろう。

#### 3-2 ジョークを英語で

「英語でジョークが言える」ように学生を指導することは、不可能でないとしても、かなり難しい作業に違いない。ジョークの才能などは、およそ天性のものであって、訓練次第とは行かないであろうが、笑いを引き出すセリフを組み入れたスクリプトを介して、ジョークが成立するメカニズムを学ばせることは可能かもしれない。このような経験を通して、コミュニケーション技能としてのジョークの感性を鍛えることが出来るのではないかと思っている。これが自作スクリプトにこだわる第二の理由であり、可能な限り「笑えるセリフ」を組み込もう

とする理由でもある。以下、「サルカニ合戦(The Battle Between the Monkey and the Crab)」からの抜粋を参照しながら、笑いの構造について触れておく。

#### 3-3 ジョークの構造分析

以下に取り上げるスクリプトは、ナレーターが小ガニたちの仇であるサルが、「相当に凶暴なサルだ」という巷の噂を告げた後の行である。

最初の話者Hornet(蜂)によるジョークは、ある種の「三段論法」から発生している。ここでは、各センテンスを頭から、「導入」、「展開」、「落ち」と呼んでおく。もちろん、「落ち」で笑いを誘う段取りである。

まず、「導入」で“impossible”という単語を用いて状況の説明がなされる。ここが“difficult”や“not easy”では話にならないのは言うまでもない。続いて、売れ筋の洋画、“Mission Impossible”のタイトル名が出される。「我々だけで、サルをやっつけるのは不可能だ」という導入のセリフから、「不可能な任務(Mission Impossible)」を連想することは難しくない。そして、映画中の主演であるトム・クルーズの名前が飛び出す。日本の昔話に現在の俳優名が登場する意外性も手伝って、笑いが生まれる。

次のKid Crab B(子ガニB)が放つジョークも、基本的に同じ構造である。導入で、Mr. George Bushという人名を出す。またもや日本の昔話には無縁の名前が登場するが、Hornetによる「トム・クルーズ発言」によって、すでに違和感のないものになっている。いきなりGeorge Bushが出てきていたら、あまりの唐突さに効果は半減するものと推測される。導入でブッシュ氏に「米兵の一部を派兵する気はないか」と尋ねてみてはどうかという、非現実的でかつ無茶な提案は、これだけでも「笑える」かもしれないが、この提案が意外と「無茶」ではない思えるように話を進めて、笑いの増幅を狙うのである。つまり、「展開」で大統領選に近いことを知らせ、「有権者の歓心を買うためには何でもするだろう」と落とすのである。

最後のChestnut(栗)のセリフであるが、ここでの笑いは、「対比」と佐生が呼ぶ手法から発生する。セリフの前半と後半の発言内容(或いは内容に反映される人格)にギャップを生じさせることで笑いを誘う手法である。

前半部分のChestnutからは、Hornetによるブッシュ大統領に対する不遜とも取れる発言を、論すセリフが発せられる。そんなクールさとは対照的に、続くセリフでは、「私はトニー・ブレアが好みだわ」などと豹変している。

### 3-4 自作スクリプト、その他の利点

この章を締めるにあたって、自作スクリプトならではの2つ利点を書き加えておきたい。一つ目の利点は、役を演じる個々の学生に応じて、セリフを創作出来ることである。上で論じたChestnutのセリフを例にとると、実際にChestnut役を演じた学生がブレア英国首相のファンであったという事実を考慮して、セリフが書かれた。この学生の、このセリフへの思い入れには格別のものがあった上に、脚本を書く側も大いに楽しんだようである。もう一つの利点は、その時々話題になっている国内外の時事問題を自由自在に加えることが出来ることである。上で述べた米国の大統領選などはその一例である。自作の「桃太郎」では、過去2回、ジョージ・ブッシュ米国大統領のスピーチの一部を拝借して、劇中で演説を行っている。

### 3-5 スクリプト

以下に上で解説を試みた台詞を記載する。

Hornet: If the rumor is right, it's impossible for us alone to get the monkey. This would be what they call "Mission Impossible," you know. We have no Tom Cruise around here.

[もし噂が本当なら、我々だけでサルをやっつけるのは不可能だ。これは、いわゆる「ミッション・インポッシブル(不可能な特殊任務)」というやつだな。ここいらに、トム・クルーズはいないしな。]

Kid Crab B: Can we ask Mr. George Bush if he is interested in dispatching some of his soldiers to help us? This is another election year in the US, you know. I guess he would do anything to attract the voters.

[ブッシュ大統領に米兵を一部派遣する気はないか尋ねてみたらどうかな。米国では、今年また選挙があるから。有権者の気を引くために何でもやるんじゃないかな。]

Hornet: Well, I doubt it. Have you ever had a chance to see some of the pictures in Mr. Lemmer's office? I mean those pictures he put on the wall. There are several pictures of Mr. Bush side by side with those of monkeys and chimps. Now, let me tell you, Mr. president sure looks like a monkey and, well, I mean, those animals look like the president. Well, I'm just trying to be polite here. Anyway, what I'm saying is that Mr. Bush would feel strongly toward monkeys; and therefore, it would be out of the question for him to be mean to the animal.

[それはどうかな。レマー先生の研究室にある写真を見たことがあるか。彼が壁に貼ってる写真だよ。ブッシュ氏の写真の隣にサルとチンパンの写真が貼ってある。あのね、大統領の顔がなんとサルに似ていることか、いや、サルが大統領に似ていると言うべきか。不遜にならないように。私が言わんとしていることは、ブッシュ氏はサルたちに愛着をもっているだろうから、彼がやつらに意地悪くするなんて考えられない、ってこと。]

Chestnut: Are you suggesting President Bush resembles a monkey? We should never say things like this, at least, in public. He is a head of a state and deserves the deepest respect even from people of other countries. All right? Speaking of heads of a state, I prefer Tony, Tony Blair. Oh, Tony, my dear.

[あなた、ブッシュ大統領がサルに似てるっておっしゃるの。そんな事、決して言うべきことじゃないわ、すくなくとも公衆の面前では。彼は国家元首であって、他国の国民からも深い尊敬の念を払われて然るべきだわ。お分かり。国家元首といえば、私はトニー、トニー・ブレア氏が好みだわ。おー、愛しのトニー様。]

#### 4. 英語劇の授業への導入：その利点と問題点

インフォーマルに行った劇団の学生8名（卒業生を含む）へのインタビューでは、全員から「授業で同じ事ができれば、良いと思う」と回答があった。演劇を授業に導入するメリットは、確かにいくつも考えられるのであるが、主に評価の問題がネックになって、現在、英語コミュニケーション学科では導入に二の足を踏んでいる。以下、利点と問題点を考察しておきたい。

「一つの演題に取り組んで、どの様な効果があったか」と尋ねると、以下の事項が複数の団員から回答として出された。回答数の多いものから順に並べてみる。

- 1) 発音やイントネーションが良くなった。(8人)
- 2) 自信がついた。(5人)
- 3) 語彙が増えた。(4人)

##### 4-1 発音とイントネーションの向上

音声学的な改善に関する1)については、奥村(2004)がゼミの英語劇公演を成功させた後にゼミ生から得た反応とも合致する。<sup>1)</sup> 劇団The Peach Pitsの場合、英語コミュニケーション学科のカリキュラムに、授業科目としての「スピーチ・クリニック」がないこともあって、稽古の間に行われる個人指導が学生の音声面の向上（特にイントネーションとリズムの点で）に大きく貢献しているようである。但し、この章のテーマである「授業への演劇の導入」によって、同程度の効果が得られるかは疑問ではある。なぜなら、舞台を目指して行われる音声指導に費やされる時間は、一コマの授業で各学生に配分できるものとは比較にならないほど多いからである。しかし時間的に制限された授業内の場合でも、それ相応の効果が期待できるかもしれない。スタン(1983)の報告によれば、ESLの学生がドラマ活動を通して、授業の目的である発音とイントネーションの改善ができたとある。<sup>2)</sup>

##### 4-2 自信がついた

演劇活動を通して、英語を話す自信、それも人前で話すことに怯まない自信を身につけたと言う団員が少なくない。同様の報告を、前出のスタン(1983)も行っている。

主役やそれに匹敵する大役を果たした者ほど、舞台後の自信の度合いが大きいのは言うまでもない。団員の一人は、「やる前には、自分には絶対不可能と思っていたことが、実際には出来たんですからね」と成し遂げたことの大きさと感慨を語った。授業内の演劇の場合、台詞の量などにおいて、縮小することになると思われるが、舞台の達成感と同様の自信を学生にもたらすことであろう。

##### 4-3 語彙が増えた

英語による演劇のもう一つの効用は、語彙の増大である。これには、まったくの新語が増える場合と、知っていても実際には使えなかった語彙が、発話の場で使えるようになる、所謂RecognitionからProductionへの移行というのが考えられる。新語の習得が、即Productionにつながるのが演劇の利点であろう。さらに、ほとんどの台詞がセンテンスから成立している以上、増えるものは語彙(words)に留まらず、表現(expressions)が加わることは言うまでもない。また、自分の配役の台詞だけではなく、前後にある他者の台詞を知っておかないと自然な立ち振る舞いが出来ないために、覚える必要のある台詞がさらに増えるという事実も、語彙と表現の増大に貢献している。

配 役	登 場 回 数	台 詞 数
サ ル	24	112 [ 5 ]
母 カ ニ	17	45 [ 2 ]
子 カ ニ A	10	26 [ 2 ]
子 カ ニ B	14	26 [ 8 ]
は ち	8	23 [ 8 ]
ク リ	8	19 [ 3 ]
ウ ス	10	29 [ 4 ]
ナ レ ー タ ー	12	53 [ 28 ]

表2 登場回数と台詞数

表2は、「サルカニ合戦」に登場する配役と各自の登場回数（または発話の機会）及び劇中で述べる台詞の総数を示したものである。サルを例にとると、発話の機会を24回与えられて、全部で112のセンテンスを口にすることになる。括弧内の数字は、リーディングの際に「長

い文」と見なされる16語以上からなるセンテンスの数を示している。サルの場合は5つ、ナレーターの場合は、半分以上の28である。これだけの量を記憶し、自由に使えるようになるまで訓練すれば、語彙も表現も増えない方がおかしい程である。

#### 4-4 導入への問題点：評価の仕方

演劇を授業に取り入れる際の問題点は、何を基準にして評価するかにつきる様に思われる。表2にある数字が示すものは、配役によって、「課題の量が違う」ことである。上の「サルカニ合戦」の場合、台詞の数が112対19となるサルとクリを、同じ土俵で評価することは不可能であろう。

問題を回避する方法は2つある。一つは、台詞の数等、登場人物の負担を可能な限り均一にすることである。この様な制限が加わると、適当な教材が簡単に見つからないということが起こるのであろうが、その場合は担当者が自作のSCRIPTを創作すれば良い。自作SCRIPTの効用が、極めて高いことは小論で述べてきた通りである。さらに担当教員自らが筆をとることで、授業に対する教員の熱意のほどが参加する学生に伝わり、指導の上で、好ましい影響を与えることは十分に考えられる。また、授業では劇団The Peach Pitsのように、日本の昔話に拘る必要がないので、題材を広く日常の話題に求めることも可能である。

もう一つの方策は、厳密な意味での評価を放棄することである。評価方法が確立していないことを理由に、演劇の導入に伴って発生するであろう幾つもの利点を活かさない手はない。授業の本来の目的は、学生の英語力を

伸ばすことであって、評価それ自体が目的ではないのであるから。また、評価の放棄といっても、もちろん全くの無評価ではない。与えられた役を作り上げていく段階で、英語の音声面と演技力の向上に対して、どれくらいの努力が払われ、どこまでの役作りに成功したかを、まずは本人自身で自己評価を行い、担当教員の見解と摺り合わせて、最終的な評価を出せばよい。他者との比較による評価ではなく、あくまで自己完結的な評価が望まれるところである。

## おわりに

本小論では、現在、中国短期大学のクラブの一つとして、英語による演劇活動に携わっているThe Peach Pitsを紹介してきた。年間に2度の公演では、日本の昔話が自作のSCRIPTを用いて演じられている。SCRIPTには、ジョークがふんだんに盛り込まれ、笑いのコミュニケーション技法に触れることができるようになっていく。

英語劇の練習を通して、音声面の上達、語彙の増加、さらに英語を話す自信が増幅するという効果が確認されている。これらの効果が、授業の一環として演劇に取り組んでみたいと思わせる要因である。但し、配役によって、台詞の数が異なるなど、評価を著しく困難にする要因もある。現在の英語コミュニケーション学科の総意は、「一人でも多くの学生に英語劇の面白さに触れるチャンスを与えてあげたい」というものである。早期の導入が実現するように、鋭意取り組んで行きたいと思う。

## 注

- 1) 奥村義博, 英語劇上演をめぐる一第一回ゼミ公演から一, 松山大学, 言語文化研究 第24巻第1号, 2004年, 頁8-9。
- 2) Stern, S., Why Drama works: a psycholinguistic perspective. In J. Oller & P. Richard-Amoto (Eds.) Methods that work, Rowley, MA: Newbury House, 1983, PP.207-225.